3. 書の文化の伝承

◎第１０回大仏書道大会「書くことは楽しいin奈良」を開催

実施日　令和元年１１月９日（土）～１０日（日）

会　場　東大寺大仏殿西回廊

審査会の様子（朝日新聞社奈良総局）

展覧会の様子

森本長老の講話に耳を傾ける

１１月９日（土）から１０日（日）の２日間、東大寺大仏殿西回廊に於いて、「第１０回大仏書道大会」の書道展を開催しました。１０日（日）には表彰式・席書会・大仏さまへの作品奉納を行いました。

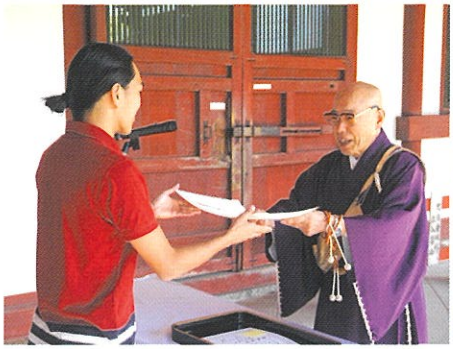
当書道展は、書の可能性を感じさせるような作品、単なる教科書的な技術だけではなく、自由な感性、創造性や味わい深さなども加味し光をあてる稀有な大会として、全国から毎年多数の応募をいただいています。平城遷都１３００年を記念して始まり、今年で第１０回目を迎えました。

今回は１０回目の節目となる大会にふさわしく、全国72の高校・大学から2001点の応募があり、応募校、応募作品ともに過去最多となりました。

同書道展にさきがけ１０月１６日、朝日新聞社奈良総局において森本公誠・東大寺長老（当フォーラム理事・特別顧問）を審査委員長に迎え、奈良県教育委員会の書道担当職員、高校や大学の書道教員の方々に審査に携わっていただき、７点の特別賞と９３点の入賞作品を選定しました。若者らしい個性を発揮した作品が数多く見られました。

また、奨励賞に榛生昇陽高等学校（奈良県）、山形西高等学校（山形県）、久喜高等学校（埼玉県）の３校が選ばれました。

今年も受賞作品１００点を大仏殿西回廊に展示しました。折から正倉院展の開催期間と重なり、地元奈良のみならず全国各地・海外からの参拝客、観光客の方にも観覧していただき、１２００名余りの来場を得ました。２日目は席書会も開催し、森本長老の講話の後、高校生・大学生約２０名が華厳唯心偈（百字心経）の写経と自由な作品創作を行いました。その後、森本長老のご案内で、大仏さまの台座へ上がって作品を奉納しました。

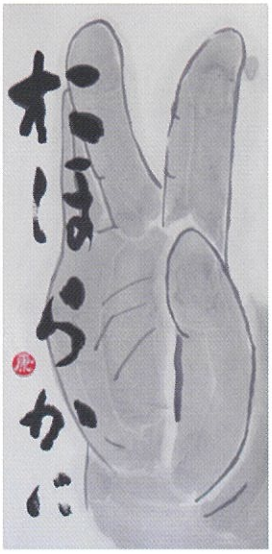


表彰状が授与される

席書会の様子

登壇して大仏様に作品の奉納

特別賞（7 点）



奈良県知事賞「於ほらかに」
西村　康さん（東大寺学園高校）

会津八一の歌「おほらかに　もろてのゆびを　ひらかせて　おほきほとけは　あまたらしたり」の全文を書かず、ひらいたゆびと書き出しの五文字によるまさに大らかな構成です。明治の大修理中にその足場の上から八一が参拝したという、その目の高さで指を描きましたか？八一の歌（仏教の華厳の宇宙観や祈り）に重ねた作者の願いが、ズシンと伝わってきます。

奈良県教育長賞「決意」
西本有希さん（奈良女子大学）

文字をくっつけて書くのは意外に難しいものです。恩師の大切な言葉を下絵の丸と連動させた「かたまり」で書き、余白を作りました。大小の丸（シャボン玉）により、その余白に遠近感が生まれています。丸の筆の動きは大きく、毛筆を好んで学んだ者の線質です。印の位置もよい。

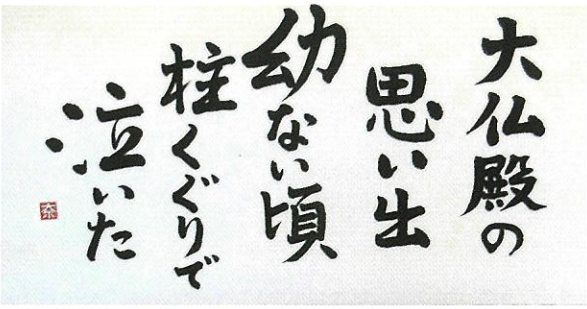
奈良市長賞　「命」
大嶋　碧さん（埼玉県立越ケ谷高校）

隷書体で命と書き、そのまま作者は筆を体ごと大きく回して？の点まで書き進めました。毛筆でしか出せない渇筆を伴う？の生きた線により、見たことのない大胆な構図となりました。不安と疑問だらけの人生を文字と記号で表現するとはおもしろい発想と試みです。

奈良市教育長賞　「未完」
**　杉本有香さん　（新潟県立新津南高校）**

「未完」は「未完の大器」を思わせる若者らしい語句で、いいですね。この語句の表現手段として文字を白抜きにし、はけで墨をぬらず筆勢を残したことで、思いが伝わります。「何をどう表現するか」をしっかり意識して作品作りをしている点が素晴らしい。

東大寺賞　「祖父と行った大仏殿での出来事 ---」
**　柴田ななはさん（大阪国際滝井高校）**

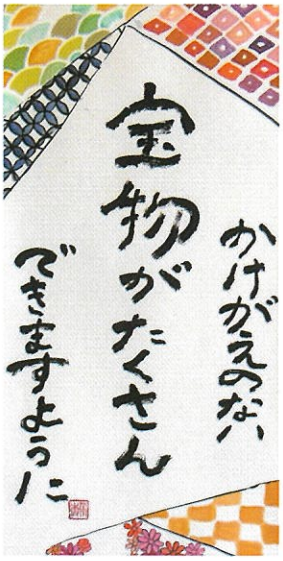


大仏殿には大仏さんの鼻と同じ大きさの穴が空いた不思議な柱があり、この「穴くぐり」に連日、行列ができています。幼い頃の作者の思い出が審査委員長森本長老の目に止まりました。行頭の文字を横に並べず書き出しを工夫して五行にまとめ、素直な筆使いです。「泣」の四つの点は、空間を生み、絶妙です。

朝日新聞社賞　「飛鳥大仏」
**　嶋田鈴菜さん（育英西高校）**

生まれ育った所と人々との思い出を簡潔な文で綴りました。春は…と『枕草子』のような構成で展開、小学生の絵日記を思わせる絵もまた効果的でほのぼのと共感できる情景が目に浮かびます。朝日新聞社の小滝さんが、「みっちゃん落ちて泣いた」がいいね、と…。
筆使いや文字の配列は自然で、よく収まっています。

奈良 21 世紀フォーラム理事長賞　「宝物」
**　廣岡茉奈さん（大阪府立今宮高校）**



日本の伝統的な文様をあしらったことで書かれている言葉（かけがえのない宝物）に深い意味と広がりを感じさせていると思います。筆をすべらせないで、しっかりと紙に食いこませる筆運びです。作者の願いが一字一字に込められているようです。